

大岡高塚古墳発掘調査現地説明会資料

平成 19 年 2 月 4 日

調査地 滋賀県犬上郡多賀町大字大岡地先
調査期間 平成 18 年 5 月～12 月
調査面積 約 30 m²
調査主体 多賀町教育委員会

1. 大岡高塚古墳とその周辺

大岡高塚古墳は、明治 20 年（1887）頃に山に道をつけようとした時に石室につきあたり、それ以来放置されて、村の子供たちの遊び場になったと言われていました（『多賀町史』上巻より）。石室内から出土したと伝えられる土器類は文化財センターに保管されています。昭和 56 年には町の史跡に指定されました。

大岡高塚古墳は平野部に接する山裾部に位置し、『滋賀県遺跡目録（昭和 40 年度）』によると 13 基の古墳が分布するとされています（大岡古墳群）。大岡高塚古墳から西へ 500 m ほど離れた平野部では、ほ場整備事業に伴う発掘調査で 5 基の古墳が確認されています（石塚古墳群）。これらはすでに開墾によって削平され、埋葬主体部の構造は不明ですが、1 号墳は直径 26 m を測る楕円形の墳丘を持つ比較的大きな古墳であったようです。

この頃、下流の芹川扇状地では開発がおこなわれ、集落が形成されていました（木曾遺跡、土田遺跡）。木曾遺跡では、渡来人に関係するとみられる大壁建物が 2 棟確認されており、扇状地の開発に渡来人も関係していたと考えられています。

2. 調査の成果

（1）調査前の状況

調査前の大岡高塚古墳は、奥壁に接する側壁の一石が取り外され、そこから中に自由に入出りができる状態でした。玄室内には高さ 1～1.5 m の土が流入しており、羨道はほとんど埋没して人が通れる隙間はありませんでした。開口部側の地面には、羨道の天井石が一部露出していました。

（2）調査中の状況

開口部側から掘り進めたところ、天井石と考えられる大型の石が、1 石羨道内に落下しており、その下には側壁に使用されたと考えられる石が羨道床面上に落ちていました。玄室の側壁は最大で 50 cm も内部に押し出されていたり、大型の石材が多数抜け落ちて不安定な部分があり、崩落の危険があることが判明しました。

また、遺物の出土状況や床面の状況から、かなりの盗掘の被害にあっていると考えられ、奥壁側で盗掘坑が掘られていたり、羨道床面付近では火を焚いた痕跡に混じって中世の土師器皿や煮炊具が出土しています。

（3）調査の成果

①石室の規模

石室は、西に開口する全長 11.6 m の右片袖式の横穴式石室で、玄室が長さ 5.2 m、奥壁高さ 3 m、袖部高さ 2.9 m、奥壁幅 1.8 m、袖部幅 2.0 m、羨道は長さ 6.4 m、玄門部高さ 1.8 m、開口部高さ 2.1 m、玄門部幅 1.3 m、開口部幅 1.4 m を測ります。

奥壁や天井石に使用された石材はかなりの規模を有し、奥壁の基底石は床面からの高さ 2.2 m、幅 1.8 m を測る巨石を使用しています。天井石は 3 石で構成され、そのうちの 2 石は径 2.1 m、2.5 m を超える巨石が使用されています。

②石室の構造

玄室の平面形は、中央幅がやや膨らむ胴張り状になっています。側壁はほぼ垂直に立ち上がります。玄室床面上からは径5～15cmの河原石が多数出土したため、当初は礫が敷かれていた可能性があります。攪乱によって明確ではありませんでした。

また、近江湖東地域に広く認められる、玄室と羨道に段差を設ける形態（階段式石室）と共通する要素もみられる一方、独自の様相も呈しています。玄門部に設置された敷居石より羨道側に盛土がなされ、羨道が一段高くなる構造は他にも認められますが、当古墳の場合、開口部から3.7m入った羨道の途中にも一段段差を設けて、開口部から玄室へ至るまでに階段状に二段下がる特徴を持っています。天井の高さも羨道の段差に応じて変化しています。

さらに、この羨道中の一段下がった場所の床面には、1×1mの範囲に玄室のものに比べてやや小ぶりの河原石が敷き詰められており、その直上から馬具が出土しています。

開口部付近を一部調査した結果、石室開口部から西側（奥壁から向かって正面）に盛土された墓道が続くとみられます。

③墳丘

墳丘の調査は今回実施していませんが、現状の様子から円墳と考えられます。墳丘の直径は東西26m、南北22mを測ります。

（4）出土遺物

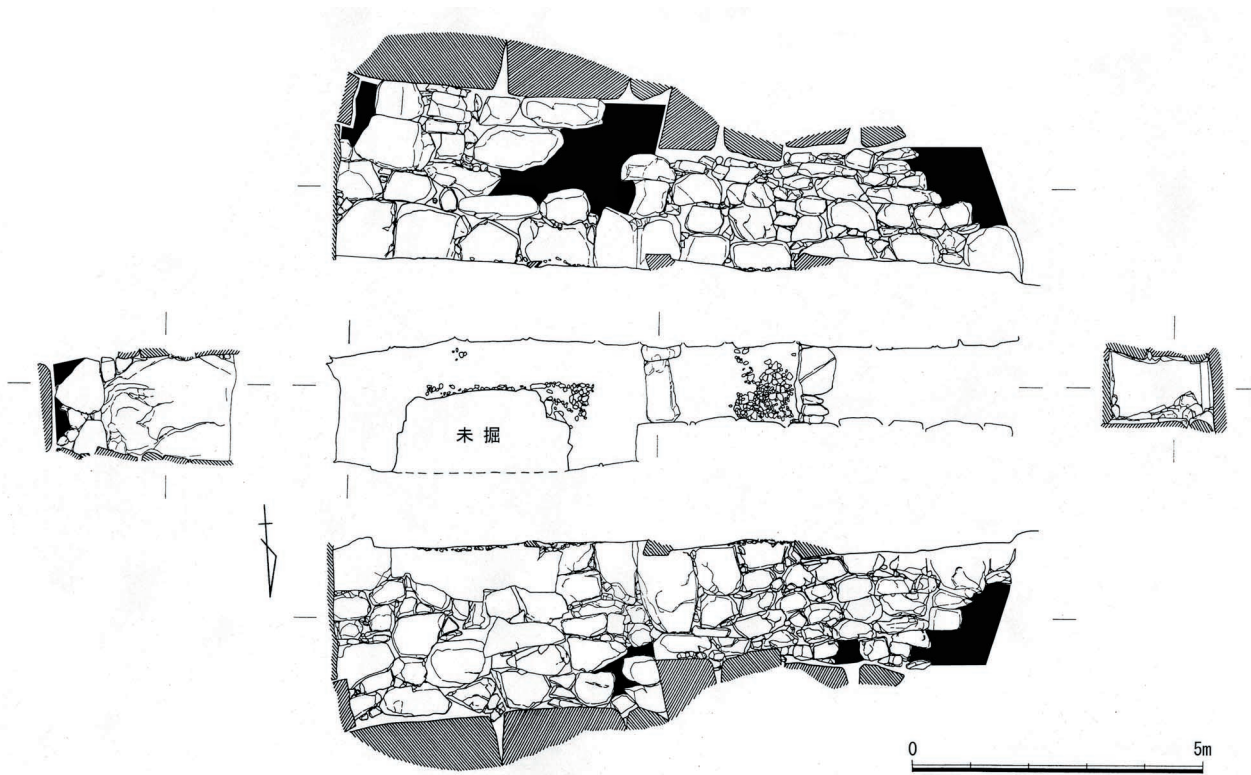
遺物は、装身具を中心に盗掘によって大部分が持ち去られているようで、原位置を留めているものほとんどありませんでした。装身具類は、玄室内で管玉が1点、耳環が2点（羨道で2点）、羨道にガラス玉が1点出土しています。鉄製品は、馬具、武器（鉄鏃）、工具（やりがんな）、釘が出土しています。馬具は轡が3点（3組）、鐙鞞が2点（1組）、辻金具が18点（1組?）が出土しています。

土器はほとんど割れた状態で破片が散在しており、完全に復元できるものは多くはありませんが、須恵器は杯身・杯蓋・高杯・はそう・台付椀・広口壺などが出土しています。土師器は甕が1点出土しています。

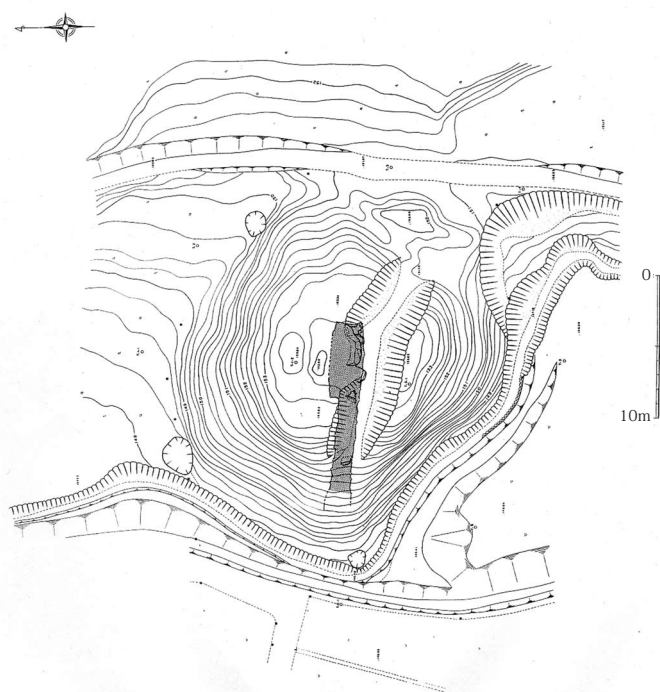
出土した土器の時期から、当古墳は6世紀後半に築造、埋葬され、6世紀末～7世紀初頭と7世紀前半の2回にわたり追葬がおこなわれたと考えられます。

3. まとめ

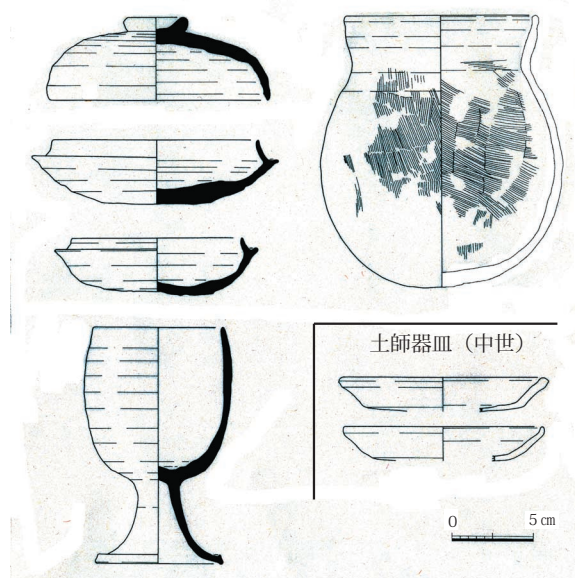
これまで、犬上郡では首長墓クラスの古墳の存在があまり知られていない地域でしたが、今回の調査で大岡高塚古墳が首長墓クラスの石室を有することが明らかとなりました。また、馬具がまとまって出土したことも、当古墳の被葬者の力の大きさを示しているといえます。近年、県下第2位の規模を持つ前方後円墳【荒神山古墳（彦根市）・古墳時代前期後半（4世紀末）】が発見されており、犬上郡の首長墓の新たな資料が増えつつあります。犬上郡の首長墓は未解明の部分が多く、今後新たな発見が期待されます。



大岡高塚古墳実測図



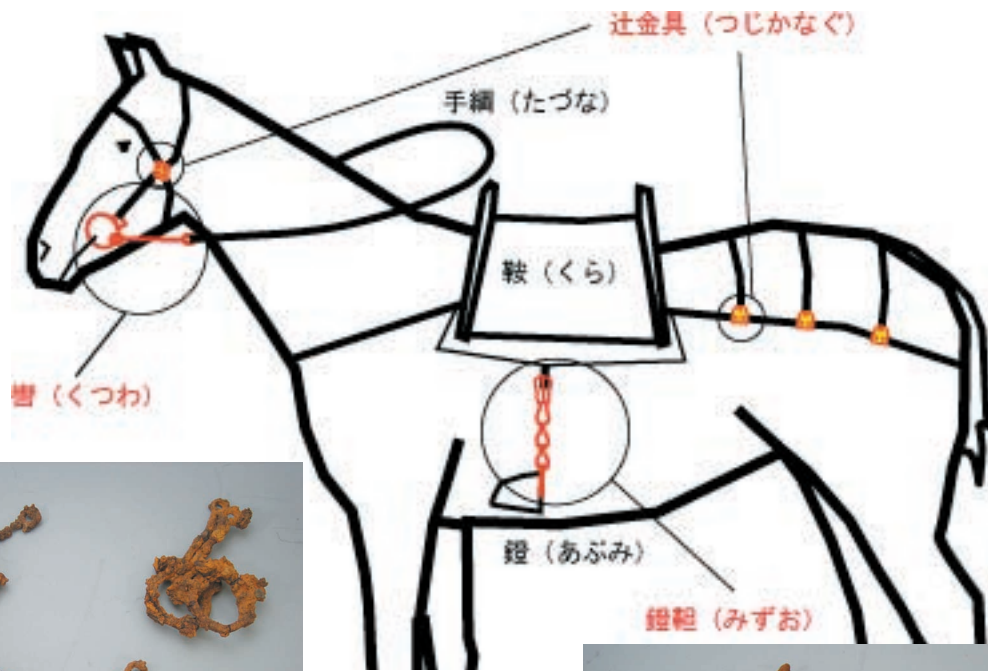
大岡高塚古墳墳丘測量図



出土遺物実測図



馬具出土状況（玄室側から）



馬具出土部位（丸の部分）